

《2013年1月 月例会報告》

【日 時】2013年1月23日（水）19:00～21:00（その後「ルン」～2:30頃?）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】ラグビー・トップリーグの現状と課題

ー トップリーガーの生活から見える2019年への課題

【演 者】浦和俊介（株）フォーレックス

【参加者（会員）10名】井上俊也（大妻女子大学）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、浦和俊介（株）フォーレックス、小澤響平（(有)エムアンドワイ企画サービス）、嶋崎雅規（帝京高校）、白井久明（弁護士）、白髭隆幸（国際スポーツプレス協会会員）、竹内傑（早稲田中学・高等学校）、中塚義実（筑波大学附属高校）、松岡耕自（立命館大学サッカー部コーチ）

【参加者（未会員）3名】★宮崎和哉（都立六本木高校）、★高松政裕（弁護士）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）

【ルンからの参加者】竹中茂雄

【報告書作成者】高田勝敏

注1）★は初参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

ラグビー・トップリーグの現状と課題

ー トップリーガーの生活から見える 2019 年への課題ー

浦和俊介（株）フォーレックス

< 目 次 >

I. プレゼンテーション① ラグビー・トップリーグの現状と課題

1. はじめに
2. 世界の中の日本
3. トップリーガーの生活

II. ディスカッション① トップリーグにおけるチームと選手の位置づけ

III. プレゼンテーション② トップリーガーの生活から見える 2019 年への課題

1. 大会の準備は進んでいるか
2. アンダー世代の強化は進んでいるか
3. 2019 年への課題
4. 日本ラグビー強化のために

IV. ディスカッション②

1. 日本ラグビー界の競技会構造
2. ラグビー人口を増やすためにーテレビ放送との関係
3. 企業スポーツとしてのラグビー界の体質
4. トップリーグと社会人選手権ーレベルアップにつながる競技会は？
5. 2019 年の先には…
6. 学校から地域クラブへーラグビーの受け皿を
7. ユース年代からの育成と普及

V. 参加者からのコメント

I. プレゼンテーション① ラグビー・トップリーグの現状と課題

浦和俊介 (株)フォーレックス

1. はじめに

今回ジャパンラグビートップリーグをテーマに、トップリーガーがシーズン中、シーズンオフにどのような生活をしているのかを一つの実例報告にして、今トップリーグがどのように動いて2019年にどう向かっていくかということ、私なりに意見、問題定義をして行きたいと思います。

はじめに、2019年にラグビーワールドカップがアジアで初めて、日本において開催されることになったのですが、皆さんご存知のようにラグビーワールドカップは非常に大きい大会でして、サッカーのワールドカップ、オリンピックに次ぐ大会と言われています。世界の大きいイベントであるツール・ド・フランスやF1などと同様の市場規模の大会が7年後に日本で開催されることが決まっています。

2002年のサッカーワールドカップがそうであったように、開催国の活躍は大会成功の重要な要素の一つと言えます。世界大会との関わりというテーマはサロンで2000年代から度々月例会が行われていたと思いますが、今回は競技力にフォーカスをあわせてプレゼンテーションを進めて行きたいと思います。

日本代表を強くしようと考えたときに、国内最高峰のリーグであるラグビートップリーグの果たす役割はきわめて大きいと言えます

2. 世界の中の日本

ご存知の方も多いかと思いますが、まずは今日本が世界のラグビーの中でどこにいるのかを簡単に説明していきたいです。ラグビーワールドカップはこれまで7回開催されていますが、日本代表は全ての大会に出場しています。通算成績は1勝2分21敗で、すべての大会でグループリーグ敗退となっています。直近の2011年ニュージーランド大会ではグループ最下位でした。そしてサッカーのFIFAランキングのようにラグビーでもIRB世界ランキングというものがあるのですが、現在日本は15位です。ワールドカップの参加国数は20か国なので本戦出場は固いのですが、ベスト8、すなわちノックアウトラウンドへの進出にはまだ問題が多いというのが現状です。

次の2015年イングランド大会のグループリーグ組み合わせは既に決定しています。前回大会グループリーグ3位までは予選が免除されます。これを「ワールドカップ・シード国」と定義して、今回プレゼンを進めていきます。

本大会で、日本は、南アフリカ (IRB ランキング 2位: 以下数字のみ)、サモア(7)、スコットランド(12)、アメリカ地区第二代表 [カナダ(14)or アメリカ(16)] と対戦することになっています。ランキングを見ると南アフリカ以外には勝つ可能性があるんじゃないのかと思いますが、これにはカラクリがあって (後述)、なかなかそうもいきません。

現在の日本代表の目標は、2015年までに、今の15位から10位にランクアップし、自国開催の2019年には、強豪国・伝統国の一画を崩し、ベスト8へ進出、決勝トーナメントへ、となります。この目標を達成するためには、試合を行ってチームを強化していかなくてはなりません。ラグビーではテストマッチ (国代表同士の公式戦) を行う為の期間 (ウィンドウマンズ) が6月と11月に定められており、この期間は各国のリーグ戦は行われません。6月には北半球のチームが南半球へ、そして11月には南半球のチームが北半球へと遠征をします。テストマッチは過去の戦歴をもとにIRBがマッチメイクをするのですが、ワールドカップ・シード国を中心としたランキングの上位国のみがマッチメイクの対象となり、その他の国はIRBが斡旋してくれる以外の所で試合を行っているのが実状です。先ほど出たランキングのカラクリはここにありまして、例えばスコットランドは強豪国と試合をして負けたので12位にランクしていますが、日本のようなランキング下位国は、そもそも強いチームと試合をしていません。ワールドカップ・シード国とその他の国の実力差はランキングに現れる順位以上に開いているというのが現状です。

では、日本はどのようなテストマッチを行っているのかを、直近のウィンドマンズを例にとって見ていきます。

2012年11月に、日本代表は、2004年以来のヨーロッパ遠征を行いました。ちなみに2004年は、前年のワールド

カップで「ブレイブ・ブロッサムズ」と称えられる程の、ディフェンスを中心に健闘した結果を受けてヨーロッパに遠征したのですが、大敗を喫して以来、お呼びが掛からなくなってしまいました。今回はそれ以来、7年振りのヨーロッパ遠征となり、IRBのマッチメイクに引っかけられないチームを必死に探してテストマッチを行いました。ルーマニア代表(19)、グルジア代表(17)、バスク選抜、フレンチバーバリアンズ(フランスリーグ選抜)と対戦。ルーマニア、グルジアには勝利を収めました。尚、初戦のルーマニア戦での勝利は日本代表における、ヨーロッパでのテストマッチ初勝利となります。

2013年6月のウィンドウマンズでは、ブリティッシュ・アイリッシュライオンズ(全英代表)がオーストラリアへ遠征するという一大イベントがあります。この全英代表にイギリス4協会の主力選手は招集されることとなりますが、そんな中、ウェールズ代表(9)が来日し、花園(6月8日)、秩父宮(6月15日)でテストマッチが開催されます。これはIRBの2019年活性化計画の一環として開催されることとなったと思うのですが、このテストシリーズで、試合内容のみならず、観客動員数並びにメディアへのアプローチの仕方等、日本がしっかりした運営ができるのかをIRBが試しているのだと思います。今回いい試合をし、お客さんもたくさん入り、テレビ等で多く報道されることになれば2013年以降の強豪国とのテストマッチも可能になってくると思われます。

3. トップリーガーの生活

それではトップリーガーの生活に入ります。今回はパナソニックワイルドナイツを対象に、手に入る範囲の情報を使ってその内側を見ていきます。

皆さんご存知だと思いますが、トップリーグとは、過去55回開催された全国社会人大会を発展的に解消し、新たに2003~04シーズンより設立された社会人ラグビーの全国リーグです。現在14チームによる1回戦総当たりのリーグ戦と、上位4チームによるプレーオフトーナメントで年間優勝を争っています。参加チームは以下の通りです。

2012-13 トップリーグ参加チーム

親会社	チーム名	練習場所在地
パナソニック	ワイルドナイツ	群馬県大田市
NEC	グリーンロケッツ	千葉県我孫子市
NTTコミュニケーションズ	シャイニングアークス	千葉県市川市
リコー	ブラックラムズ	東京都世田谷区
東芝	ブレイブルーパス	東京都府中市
サントリー	サンゴリアス	東京都府中市
キャノン	イーグルス	東京都多摩市
ヤマハ	ジュビロ	静岡県磐田市
トヨタ	ヴェルブリッツ	愛知県豊田市
近鉄	ライナーズ	大阪府東大阪市
NTTドコモ	レッドハリケーンズ	大阪府大阪市
神戸製鉄	コベルコスティラーズ	兵庫県神戸市
九州電力	ヴォルテクス	福岡県福岡市
サニックス	ブルース	福岡県宗像市

関東に7チーム、関西に5チーム、九州に2チームとなっています。4チームが東京に所在地を置いており、今回のトップリーグ決勝は東芝対サントリーなので府中タービーということになります。

トップリーグ以前との比較をひと言で言いますと、選手個々の能力の著しい向上ということになります。それに

伴い、チーム戦略・戦術が充実しました。また、一流外国人が多数来日し、日本人選手の意識改革が進み、練習に本気で取り組める環境ができ上がったといえます。ちょうどJリーグによってサッカーにもたらされた光景と同じことがラグビーにも起こりました。

過去と現在の試合映像を見ていただき、どのように変化したかを確認したいと思います。

【参考】試合映像上映

ご覧になって頂いたとおり、年代を追うごとにフィジカル・戦術共に向上していることがわかります。以下の資料では、選手の体格の変化を確認することができます。

チーム名	新日鉄釜石	神戸製鋼	サントリー	サントリー
大会	85年釜石V7	95年神戸製鋼V7	2002年、第55回社会人選手権	2012年トップリーグ
チーム平均身長	177	179	181	183
チーム平均体重	81	89	91	96
FW平均体重	88	97	100	102

釜石時代は、現在、花園の準決勝・決勝に進出する高校生よりも小さいくらいの体格です。1995年以降は緩やかな上昇ですが、映像で見て頂いたようにフィジカル・フィットネス面で大幅に進歩しています。またトップリーグは公式戦が継続して行われますので、選手の持久力も強化されてきました。

さて今回は、パナソニック・ワイルドナイツが1年間どのように生活をしているかというのがテーマになります。

まず簡単にチームを紹介します。1960年に東京三洋ラグビー部として創部され、全日本社会人大会では優勝が1回（サントリーと両者優勝）、準優勝が8回、トップリーグ設立後、優勝することができるようになり、日本選手権3回、トップリーグで1度優勝をしています。ご存知のように三洋がパナソニックに買収されましたので、2011年よりパナソニックワイルドナイツに名前が変わりました。グラウンド所在地は群馬県太田市。選手は44名、コーチが5名、スタッフ6名、その他にもチームをサポートする人たちがいます。

お配りした表では、ホームページ上に掲載されていた練習スケジュールを落とし込んでいます。ワイルドナイツの選手は、実際はほとんどがプロ選手なのですが、アマチュア選手がいたらと仮定して練習のない午前中乃至午後には仕事と記入してあります。

【参考】パナソニック・ワイルドナイツ・スケジュール：HPより作成 <http://panasonic.co.jp/sports/rugby/>

ラグビー選手がシーズン以外ではどんなことをしているかという点、大きく春シーズンとプレシーズンの2期に分かれます。4月から6月の春シーズンでは個人のフィットネス、フィジカル・スキルを強化し、7月から8月のプレシーズンでは、各ポジション・ユニットの連携、チーム戦略・戦術の意思統一を図ります。シーズンは9月から始まりますが、先程お話ししたように、ウィンドウズマンズが11月にありますので、シーズンは一時休止、11月後半からシーズンは再開されます。

春シーズンにおいては個人の練習がメインなので、仕事をうまくやりくりすれば、アマチュアの選手でもトレーニングすることは可能かと思います。ただし、各ポジションユニットの連携、チーム戦略がテーマとなるプレシーズン、そして毎週試合のあるシーズン中は、アマチュア選手には厳しい日程となります。シーズン中の日程を一部切り取って見てみると、北海道での試合のあと、深夜に群馬に到着。その影響で翌日は休養に当てざるを得なくなり、その後もマッサージやリカバリー、戦術修正のみとなり、激しいトレーニングができるのは翌週の試合の前々

日のみとなります。このようなスケジュールですと、アマチュア選手は、1試合は出場することができても、これが毎週続くとなると途中で壊れてしまうことになり、実質的にプロ選手以外はトップリーグで活動することは不可能ということかかります。

1年間の公式戦は約17試合程度で、9月から2月までほとんど休みなく行われます。それに対し、オープン戦等の練習試合は15試合程度で、シーズン前にサテライト(2軍)に落とされてしまった選手は、年間で数試合のみを行うこととなります。

公式戦のメンバー表を見ると、年間を通して、怪我や実力差のある相手との試合以外はほぼ固定メンバーで戦っていることがわかります。

以上の内容でトップリーグの1年間の考察してみると、①年間計画を見ればほとんど作業との両立は不可能である(週4日程度の半日出勤となる)、②シーズン中はメンバーは移動調整のみ、③シーズンに入るとメンバー外選手のゲームは5試合程度のみ、また入替の機会は少ないということが分かります。

結論としては、トップリーグの選手・チームは、与えられた環境で競技力向上に最大限の努力をしている。ゲームに続けるには契約プロ選手にならざるを得ない。公式戦メンバー以外の試合環境が乏しく、トップリーグチームには育成機能はあまりないということが、トップリーグの現状だということになります。

II. ディスカッション① トップリーグにおけるチームと選手の位置づけ

牛木：トップリーグのチームというのは親会社の内部機構なのでしょうか。

浦和：そうです。

牛木：法人としてはチームが株式会社ということではなく、親会社の一部門ということになると、選手の契約というのは、親会社と契約しているということなのでしょうか。

浦和：そうですね。社会人ラグビーは、パナソニック・ワイルドナイツならば、パナソニック本社もしくは連結会計制度対象企業と1年以上の雇用契約を結ばないと社会人ラグビーに出られないというルールがあります。

「全ての登録選手が、当該法人、または以下に定義する関連法人との間に、一年以上の雇用契約を締結していなければならない」(第84条)

雇用契約を結んでいない選手が出るのは、クラブチームというカテゴリーになります。

牛木：なるほど。トップリーグは、昔で言う実業団のような形式なのですね。

浦和：日本リーグとっていただければよいと思います。日産やヤマハにプロの選手がいた当時の日本リーグに近いです。

牛木：プレゼンテーションで、プロにならざるを得ない、とありましたが、それは請負契約ではなく雇用契約ということですね。

浦和：そうです。契約社員というかたちになります。

参加者：44人選手がいたとありましたが、全員がそのような契約をしているのでしょうか。

浦和：パナソニックの場合は、1割か2割は社員かもしれませんがほとんどの選手が契約社員という形だと思います。というのも、引退した際に、社業復帰となっている選手と未定となっている選手がいますので、その際に誰が社員だったのかがわかるというのが実状です。

参加者：オーストラリアやニュージーランドから選手が来ますよね、彼らも1年以上の契約をしているのでしょうか。

浦和：選手によって複数年契約の場合もありますが、1年契約をしていると思います。

参加者：オフシーズンに帰っちゃいますよね。

浦和：出稼ぎですね。その話だけ先にしてしましましょう。お渡ししている資料でラグビーの1年という表があります。上が北半球で真ん中が南半球、そして下が日本のスケジュールになります。日本のチームはたいてい南半球から選手を連れてくるのですが、トップリーグは9月から1月、ないし2月まで行われるのですが、南半球では2月からスーパーラグビーというプロのリーグがあり、彼らは掛け持ちをしています。

ラグビー界の一年

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
北半球	クラブチーム	リーグ戦				ウインドウマンス	off	プレシーズン	リーグ戦		ウインドウマンス	リーグ戦
	代表	シックスネーションズ			合宿	テストマッチ					テストマッチ	
南半球	クラブチーム	プレシーズン	スーパーラグビー			ウインドウマンス	プレシーズン	国内リーグ		ウインドウマンス	off	
	代表					テストマッチ	ラグビーチャンピオンシップ	合宿	テストマッチ			
日本	クラブチーム	トップリーグ	off			ウインドウマンス		プレシーズン	トップリーグ	ウインドウマンス	トップリーグ	
	代表				合宿	アジア5カ国対抗	テストマッチ	PNC			テストマッチ	

参加者：それでも1年契約をしているのですか。

浦和：詳しくは各チームに問い合わせなくてはなりません。規約の通りと思われる。

参加者：そうですね。

牛木：選手への報酬は親会社から出るということでしょうか。

浦和：そのとおりです。

牛木：つまりこのチーム自体が儲ける必要がないということなのでしょうか。

浦和：儲けることができないのが実状です。もしかしたら既に変わっているかもしれませんが、ラグビーの規約の中で、先ほどの契約の条項を先にあげると、社会人とは「その法人と正規の雇用契約を締結し、就業規則に従って勤務している単一企業社員、および第79条に規定する関連法人により構成され、主企業を代表するチーム」とあります（70条7項）。一年毎のプレーヤーとしての契約が正規の雇用契約にあたるのかはわかりませんが、規約上はこのようになっています。

参加者：なんだか言い訳みたいな内容ですね。

浦和：そして規約の75条6項に「チームは有料試合を開催できない」と書いてあります。

★報告書作成者（高田）注：ラグビー協会のHPで確認したところ、75条には上記のような記載はありませんでした。現在の規約の中で、おそらく該当するであろうと思われる個所は以下の通り。

更新登録するチームのうち日本協会主催の全国大会を除き、有料試合を実施する可能性のある次に該当するチームは、年度チーム登録書（書式チーム登録特定用）を、所在地を管轄する支部協会に提出し、その承認を得なければならない。

ジャパントップリーグ所属チーム
ジャパンラグビートップイーストリーグ所属チーム
ジャパンラグビーウエストリーグA所属チーム
ジャパンラグビートップキュウシュウリーグA所属チーム
関東大学対抗戦A所属チーム
関東大学リーグ戦1部所属チーム
関西大学リーグ戦1部所属チーム
九州大学リーグ戦1部所属チーム

★発表者（浦和）補足

今回参考資料として使用した平成24年度の『関西ラグビーフットボール協会年鑑』に記載されている日本ラグビーフットボール協会規約を確認したうえで日本ラグビー協会のホームページの規約を見たところ、ホームページには規約の全文は掲載されていませんでした。規約を確認したうえで発言を補足しました。

浦和：つまりトップリーグはトップリーグ機構がすべて主催しており、自主運営になる前の日本サッカーリーグのような形です。収益はすべてトップリーグに集められ、その後配分されるかどうかまでは調べていませんが、チームにはそのまま入らないシステムになっています。

牛木：入場券販売もトップリーグが行っているということですね。

浦和：そうです。トップリーグ参加チームには、リーグに参加することによってチケットの買い取り義務が発生しています。各チームはそのチケットを販売したり、またファンクラブに配るなどして収益を上げる道を探しているということになります。

参加者：話は変わるかもしれませんが、パナソニックは他の運動部を止めている状況で、ラグビー今後どうなるかと思いつながら先日試合を見ていたのですが、その辺りはどう思われますか。

今年は2019年大会の6年前になるわけですが、サッカー界では同じ6年前の1996年には既に開催地10カ所が決定しており、アトランタオリンピックに出場し、A代表はアジアカップでベスト8でした。さらに2年前の1994年に戻ると、中田英寿が出場していたU-17の世界大会を日本で開催していました。サッカーかにおいてはこの辺りからアンダー世代の強化が実り始めていた時期とすることができると思います。ちなみに日本リーグは82年から自主運営ということで、各チームは競技場を探してホームゲームを開催していましたが、ラグビーでは未だに実施されていません。

2. アンダー世代の強化は進んでいるか

では、ラグビーではアンダー世代の強化はどのようになっているかといいますと、2009年にU-20ワールドチャンピオンシップを日本で開催しました。本来ならばここで勢いをつけたかったところなのですが降格してしまい、現在はその下のジュニアワールドトロフィーに参加しています。アンダー世代の強化という面では非常に苦しい状況です。開催地にいたっては、決定するどころか、立候補地公募の為の準備をしている段階です。実際は大阪（花園）や釜石など、自治体が個々に開催を希望しているところではありますが、それが網羅される形で雑誌等で掲載されたことはありませんので、あくまで個々で発信している状況です。

サッカーの世界カップが成功した要因としては、さきほど申し上げたように、アンダー世代の育成が実り、最終的にその選手が2002年に出場し、ベスト16という結果に結びついたという点、プロ化したことにより、ナショナルチームの基となるJリーグのチームの取り組みの質が向上し、代表チームのレベルアップに貢献した点、新潟等が例だと思いますが、1999年からJ2ができたことにより、各開催都市で日常的にサッカーが行われ、ファンの獲得に成功した点、1998年のワールドカップで認められて、中田英寿がヨーロッパに行って活躍、他の選手もそれに続いたということで、国際レベルで活躍できる選手が増えてきた。以上のようなことがあったと思います。

ラグビーにおいてそのような点はどうかと言いますと、まずアンダー世代は2009年に降格していますので、20歳代の選手がレベルの高い試合を経験することがなかなかできない。トップリーグができてことにより代表選手を中心としてプレーヤーの質は格段に向上しています。開催地に関しては、未だに秩父宮と花園のみでほとんどの大きな大会を行っています。いい情報としては、トップリーグができて10年、世界のスタンダードに追いつく練習ができてきて、今シーズンからパナソニックの田中と堀江、東芝のマイケル・リーチがスーパーラグビーのチームと契約して、世界のトップレベルで活躍できる選手がでてきたということです。

3. 2019年への課題

2019年への課題としては、トップリーグのチームが収益を得られるようにならなければならないことです。そうしなければ、これ以上のレベルアップは望めないだろうし、今の環境を維持することは不可能と言えます。またU-20世代の強化、ラグビーの世界ではジュニアワールドカップの上はワールドカップしかなく、また先述のように簡単にはテストマッチを組むことができないので、何とかジュニアワールドカップに昇格し、ここで強豪国との試合経験を積み上げることが強化の一番の近道になるはずですが。そして花園や秩父宮だけではなく、少なくとも開催地を中心としてラグビーの認知を深めていかなくてはならない。以上の3点が2019年に向けてのラグビー界の課題とすることができます。

それぞれについてもう少し細かく説明していきますと、観客動員という面で今シーズン前半、秩父宮、国立の観客動員数ランキングを見てみると、今シーズンで一番お客さんが多いのは早明戦だと思います。観客数が32,132人で、日本選手権の決勝戦を国立競技場で行ってもこの数字を抜くのは難しいでしょう。

★発表者（浦和） 補足

2月24日に行われたサントリー対神戸製鋼は14,115人でした。）

トップリーグの試合は1会場で2試合行いますので、1チームにつき3,000人が熱心に応援していることとなります。トップリーグ以外でランキングに入っている試合を見てみても、結局は早明慶を中心とした関東ラグビー対抗戦ないし、伝統校が出場する大学選手権の試合です。つまりラグビーの観客は、あくまで学校同士の対抗戦を楽しむにして足を運ぶファンが多いことが窺えます。(観客動員数トップ10のうち、トップリーグの試合は3試合)。

	日付	所属リーグ	チーム1	対	チーム2	観客数	会場	備考
1	12月2日	対抗戦	早稲田	対	明治	32,132	国立	早明戦
2	1月2日	大学選手権	筑波 帝京	対 対	東海 早稲田	20,538	国立	決勝戦(2試合)
3	1月13日	大学選手権	帝京	対	筑波	20,050	国立	決勝戦
4	11月3日	対抗戦	慶応 早稲田	対 対	明治 帝京	17,404	秩父宮	対抗戦(2試合)
5	10月20日	トップリーグA戦	サントリー 東芝	対 対	パナソニック NEC	12,556	秩父宮	トップリーグA戦
6	11月23日	対抗戦	慶応	対	早稲田	12,524	秩父宮	早慶戦
7	9月22日	トップリーグA戦	東芝 サントリー	対 対	パナソニック キヤノン	12,289	秩父宮	トップリーグA戦
8	11月18日	対抗戦	帝京	対	明治	10,648		
9	9月1日	トップリーグ1戦	東芝 パナソニック	対 対	NTTコム リコー	9,775	秩父宮	トップリーグ1戦
10	12月23日	大学選手権	東海 帝京	対 対	明治 立命館	9,668	秩父宮	大学選手権(2試合)
参考	12月8日	トップリーグ10戦	東芝		サントリー	6,761	味スタ	府中ダービー

参考までに、ともに府中に本拠地がある東芝とサントリーが味スタで行ったリーグ戦が6,761人、年末で日にちが悪かったことと、お互い決勝に行くからいいだろうというのはあったかもしれませんが、トップリーグの集客数はこの程度ということです。今回パナソニックを取り上げたのでパナソニックの観客動員はどうかと言いますと、1試合平均で5,701人で、上毛地域で開催した試合では、平均で2,000人から3,000人程度。この数字がチーム単体で集められる人数ということになります。神戸で行われた神戸製鋼戦は9,220人で突出していますが、神戸製鋼はコンスタントに6,000人から9,000人集客できるとは思っていますので、トップリーグのチーム中ではクラブ運営は図抜けて進んでいると思います。

先ほどから話に上がった通り、トップリーグは会社のチームであり、アマチュアがプロの選手を雇っているという形なっていますが、これから発展するためには、選手がプロである以上、運営側もプロになることが不可避であり、会社のチームからプロクラブになることが求められます。プロ化するということは、選手やコーチングスタッフだけではなく、運営や選手を査定するチームの管理部門やチケットを販売する営業部門にもプロとして動ける人材を確保できる環境を持つということになります。そのためにはホームタウンを確立し、ホームゲームを自主興行する環境を整えなければなりません。

また、これまでは現役を終えたら研修を受けて会社に戻ることができましたが、プロ選手でないとトップリーグを戦えないのでプロ選手が増えてきました。そこでセカンドキャリアの教育の充実が必要になってきています。トップリーグができて10年目、そろそろプロになった選手が引退する時期になってきましたので、こういった箇所の充実も必要になってきました。

そして、昨今は高校ラグビーの運営も難しくなっており、合同チームや廃部といったところも出てきていますので、高校以外でもラグビーができる環境をつくる為には、可能であればトップリーグのチームが将来的にJリ

ーグのように普及・育成機能を備えたクラブになることが望ましいと思いますが、現実的には難しいだろうと思っています。

U-20世代の問題についてももう一度お話ししたいと思います。ここを強化しないと2019年ワールドカップは厳しい結果に終わってしまうことが予想されます。何とか早い段階でジュニアワールドカップに昇格し、この年代で厳しい試合をしないとなかなか強くなることは難しいと思います。ただこの年代は、日本でいうと大学1、2年生なので公式戦での経験が不足し、厳しい試合の中で決定的な仕事はできず、ジュニアワールドトロフィーでは3年連続2位で、昇格ができないという結果に繋がっています。また大学とトップリーグではレベル差があるので、大学卒業後、トップリーグでのレギュラー定着に時間が掛かっています。チームを代表する選手になるのが大体25歳位と、ここでのタイムラグが非常に勿体ないと感じます。

4. 日本ラグビー強化のために

ここから私の私見になるのですが、それでは日本ラグビー強化のためにどうすればいいのかということで、表をご覧ください。

ラグビー強化の枠組み				
		年代別代表		
年齢	所属チーム		現状	理想
26	トップリーグ		日本代表	代表
25				テストマッチ
24				PNC
23				アジア5カ国対抗
22	大学		U-20	A代表
21				
20				
19	高校		U-20	U-20
18				JWT
17				
16	中学校		ラグビースクール	ユース3地域対抗、国体
15				U-17、9地域選抜
14	ラグビースクール			U-15 中学選抜大会
13				
12				
11	ラグビースクール			
10				

ラグビーの選手は大体この形で上に上がって行くのですが、強化という面では、U-15で中学選抜、U-17でユース3地域対抗戦・国体、そしてU-20と、ここまでは段階を踏んでいるのですが、その上が限度なく日本代表になってしまうので、それまで国際経験を積んでも、その後は経験不足に陥り、急にテストマッチに臨まざるを得ない状況です。理想としては、育成の最終段階である大学とトップリーグを結ぶA代表といった仕組みが求められると思います。

U-20世代の強化のアイデアとしましては、この世代の選手は大学に所属しているわけですが、日本協会から奨

学金を給付して、学業と代表強化を最優先に活動できる環境を整えた上で、例えばトップリーグの下部リーグにチームを作って参戦し、この世代の選手でチームを動かす経験を積む。もしくはサッカーの強化指定選手のように、トップリーグのチームに選手を派遣することも考えていかなければいけないのかなと思います。ただ、先程お話ししたように、トップリーグは試合をするための組織なので、まだ育成年代である U-20 の選手をトップリーグに派遣して期待する結果がでるか、というのは別問題だと思います。

★発表者（浦和） 補足

サロン 2002 での発表の直後、日本のパシフィック・ラグビーカップへの参加が発表になりました。今回問題提起していた U-20 と代表をつなぐ年代の強化のための大会です。

3 月から 4 月にかけて南半球に長期遠征してスーパーラグビーの育成チーム（二軍）と 6 試合行います。若手日本代表候補にとって国際試合を経験できる貴重な大会だと思います。

ワールドカップ開催地の振興については、2015 年 3 月に会場を決定するというので、これから開催地を募ることになるのですが、伝統的にラグビーが盛んな地域への働きかけはもっと積極的に行う必要があると思います。開催地として難しくても、たとえばキャンプ地の誘致とリンクさせていくことも可能かと思います。また秋田ノーザンブレッツや釜石シーウェイブスのような地元チームがない地域もありますので、地域に支えられたシニアのクラブチームを作っていきやり方も含めて、ラグビーの側からアプローチすることも必要だと思います。

まずは試合を見てお客さんに入って頂いてラグビーに興味を持って頂きたいです。関東ではいい試合がたくさんありますので是非観てください。

本日はありがとうございました。

IV. ディスカッション②

中塚：どうもありがとうございました。トップリーグの観客数からはかつての日本サッカーリーグに似ているのかなと思いましたが、その頃のサッカー界は高校サッカーや少年サッカーの盛り上がりがあったわけですから、ラグビーの現状はちょっと違うなあと思いながら聞いていました。2019 年ワールドカップ成功に向けて、皆さんの忌憚のない意見を聞かせていただければと思います。

浦和：1 件だけ先によろしいでしょうか。お配りした資料の中で、以前の月例会（2011 年 11 月）で井上さんが発表された際にも話に上がった「何の為にワールドカップを開催するのか」ということについてです。今回花園で配られたメンバー表の横に「皆さんの声を大会に」という記述がありました。大会をやることは決まっていますが、何のために大会をやるのかはまだ決まっていないという現状で、ラグビーに携わる者にしてみれば、こんなに大きな大会を軽々しく扱っていいのかと、恥ずかしい思いです。

1. 日本ラグビー界の競技会構造

中塚：その一つ前の資料はなんですか。

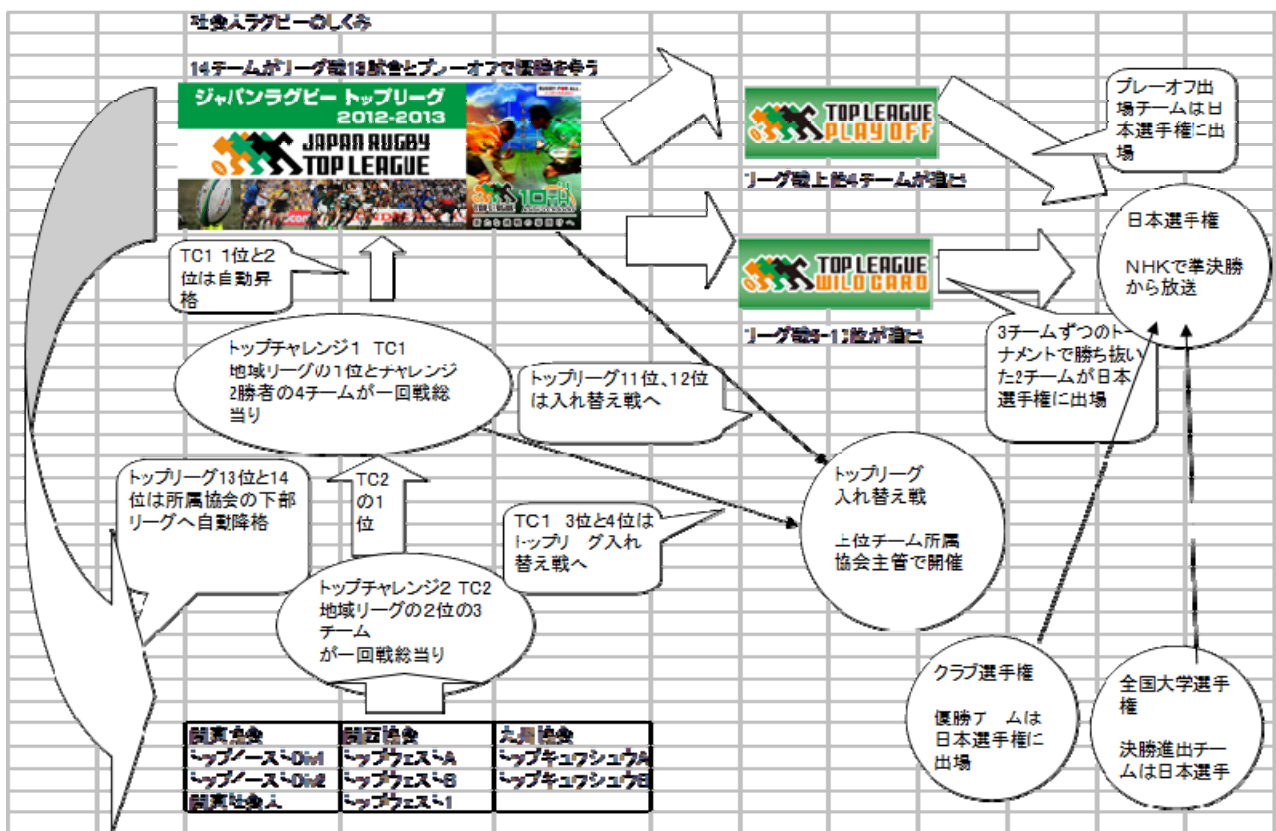
浦和：トップリーグの昇降格というのは非常に複雑なので表にしてみました。

トップリーグは 14 チームで争われるのですが、13 位と 14 位のチームは所属協会の下部リーグへ自

動降格します。昇格するためには地域リーグで1位ないし2位になる必要があります。各地域リーグの1位の3チームと、地域リーグ2位チームで争われる「トップチャレンジ2」というリーグ戦の勝者の計4チームが、リーグ戦（トップチャレンジ1）で順位を決め、上位2チームはトップリーグへ自動昇格します。またトップチャレンジ1で3位と4位になったチームは、トップリーグの11位と12位と一発勝負の入替戦を行い、来シーズンのトップリーグ参戦全チームが決定します。

ラグビー全体のスケジュールもお話すると、トップリーグはリーグ戦後、上位4チームでプレーオフトーナメントを行い、優勝チームを決定します。プレーオフにも昇降格にも関わらない5位から10位のチームは、日本選手権出場2チームを決定するワイルドカードトーナメントを戦います。このトップリーグ6チームに加え、トップチャレンジ1で優勝したチームも何故か日本選手権の出場権が与えられます。そしてクラブ選手権優勝チームと大学選手権で決勝に進んだ2チームの計10チームで日本選手権は争われ、準決勝からNHKで放送されるという流れで1年間が進んでいきます。

私見ですが、トップリーグのプレイオフで勝ったチームが一番強く、日本選手権はトップリーグという屋根の上にひさしが掛かったような状況になっているというのが感想です。トップリーグはスカパーに入らないと観れない一方で、日本選手権はNHKで放送があり誰でも見ることができるとい状況では、ユニバーサルアクセスという観点からは日本選手権の方がステータスが高いと言えるのかもしれませんが。



井上：その件で言わせて頂くと、マスコミの利権が関わってしまっていて、かつて行われていた社会人大会は朝日新聞が主催していて、その後を継いだのがトップリーグのプレーオフとなります。本当はなくしかったのですが、朝日新聞がどうしてもということで残ってしまいました。

浦和：ただ、最初はトップリーグはリーグ戦で終わり、その後「マイクロソフトカップ」という8チ

ームでの別枠大会としてあって、その後日本選手権でしたよね。それが合体してトップリーグの上に乗っかる形になりましたよね。

井上：はい。あとは色々な競技に日本選手権がある中で、ラグビーは珍しいのですが、読売・朝日・毎日・産経新聞から賞状などがもらえるという、他の競技にはない素晴らしい面ですね。あとはもちろんNHK。

中塚：マイクロソフト杯というのはなくなったのですか。

浦和：マイクロソフトが撤退したのでトップリーグ・プレイオフになりました。

井上：ヤマザキ・ナビスコ杯ではなくなってリーグカップになったようなものです。

中塚：トップリーグの1年の流れは、今シーズンだけの話ですか。

浦和：ここ数年の流れで、定着しつつあります。

中塚：ラグビー界の人はこの流れを把握しているのでしょうか（笑）。ラグビー界の方から意見が欲しいところですが、宮崎さん、どうでしょうか。

宮崎：流れは把握していますが、ラグビーに関わっている、またはラグビーが好きで観ている立場から言うと「また同じ試合やっているな」という印象ではありますね。強いチームは決まっているので、新たなチームが割って入るのは難しいのかなとは思っています。

2. ラグビー人口を増やすためにーテレビ放送との関係

参加者：いつも思うのですが、ユニバーサルアクセスという点で、スカパーで放送することは仕方がないにしても、生放送でなくても、例えば店頭や喫茶店で試合の映像が流れているという環境を作る努力をする必要があるのではないのでしょうか。

浦和：昔はTVKである程度の放送はあったのですが、今はなかなか放送されないのです。

参加者：ですから、協会の方でDVDでもシーズンをずらしてでも流せばいいのでは。

浦和：協会のHPではハイライトの動画が配信されていますが、ただ普通の人にはトップリーグを知らないのでもうそこまでたどり着かないと思います。

参加者：それならば、パソコン上でその映像が流れている場所を作ったりできるのでは。

牛木：トップリーグの放映権はスカパーが買い取っているのですか。

浦和：そうですね。日本協会が独占してスカパー（Jsky スポーツ）に一括して販売しています。Jリー

グはNHKでも放送がありますから、スカパーだけではないですかね。

牛木：Jリーグの放映権はスカパーが独占しています。NHKが地上波で放映する場合はスカパーから権利を買っています。スカパーはJ1・J2全試合を放送しています。おそらくラグビーも同様なのではないでしょうか。スカパーに入らなければならないにしても、ラグビーが観られない訳ではないのでしょうか。

浦和：サッカーはある程度、代表等で地上波の放送がありますが、ラグビーは早慶戦・早明戦・大学選手権と日本選手権の準決勝・決勝がNHKで放送されるだけでTVKでの放送もなくなってきて、毎週ラグビーの試合が放映されているという状況ではなくなくなってきているので。

嶋崎：TVKが放送できなくなった理由としては、単純にスカパーが独占したことによって放映権が値上がりしたことです。ラグビーを観たいという人はスカパーに入って試合を見ますが、例えば子どもが初めてラグビーに触れる際には、やはり地上波で放送しているので見てみようというケースが多いと思います。そういった意味で、地上波で放送がないというのは普及の面では大きなマイナスになります。高校ラグビーでは、住友グループが降りてスポンサーいなくなったことによってTBSが撤退したのですが、今では決勝戦しか全国ネットで放送していません。MBSでの放送はありますが、関東ではなくなってしまい、入口という意味では非常に厳しい状況です。トップリーグの試合は、レベルが高いのにお客さんが集まらない原因はその点にもあるのかと思います。テレビで触れて面白そうだから競技場に行ってみようとはならず、コアなファンしかラグビーを観ないのが現状です。

参加者：ですから、最近には色々なツールがあるわけですから、いかにしてきている場面を作っていくかが重要であって、放送してくれないからと言っていたのではこのままなのではないでしょうか。

嶋崎：その辺りが、トップリーグクラブへというところでお話ししたかったところなのですか、ラグビー協会という組織はドアマチュアでして、最近ではプロパーの職員の方もいらっしゃるようですが、基本的にはラグビーをやっている会社を退職したおじいちゃんとおばあちゃんとお姉ちゃんの事務員でやってるような組織で、マネジメントというものは存在しません。どのように大会の運営するかというと、全て電通や博報堂に丸投げしてしまって、彼らの好き放題。儲けるだけ儲けられて、ラグビー界には何も残らない結果になります。そういった意味で、ラグビー協会の中、ないしはトップリーグチームの中にマネジメント運営管理ができるプロの人材が必要です。トップリーグができた時に、Jリーグのように企業名を廃止せず、現在のような中途半端な形になってしまったことが一番の問題だと思います。この点に関して、どなかかご存知の方がいればお話をお伺いしたいのですが。

3. 企業スポーツとしてのラグビー界の体質

井上：私は当事者だったからわかるのですが、それはやはりラグビーというものが文化として会社に根付いていたということで外に出せなかったのです。NTTはアルディージャを持っていましたが、サッカーに関しては「外に出て行けば？」といったスタンスでしたが、ラグビーに関しては、あれだけ会社に愛されていけば外に出せないし、会社の冠は外せないですよ。それはある意味、会社の中ではあるけれども、ガラパゴス的にきちんと生息してしまったので外に出せない。それは身内の論理かもしれませんが、サッカーが100年構想でやろうとしていることを、ラグビーでは〇〇株式会社のなかで既に実現していたということです。これは私のような中にいた立場では分かりません。

浦和：ただ井上さんのいた時代は、皆仕事をしていましたよね。今はトップリーガーは仕事をしていない訳じゃな

いですか。

井上：ところが、まだ社員選手はたくさんいるんですよ。パナソニックにも東芝にも。あとラグビー界のOB、今泉さんもどこかの社長になりましたよね。

浦和：元サントリーのキャプテン、ヘッドコーチの土田さんかサントリーフーズの社長に。

井上：土田さんだった。今泉さんじゃないですね。

浦和：まだ社会人大会をやっていた頃の人は、仕事のほうも頑張って上り詰める人もいたと思いますが、今の代表クラスの選手はトップリーグと代表の活動をして、会社なんて行けないじゃないですか。そうなってくると、現役を引退した後に仕事で頑張っているだけのものが残っているのかなとは心配になります。井上さんがおっしゃった「愛されている姿」というものが、これから先ずっと続くとは限らないと思います。トップイーストクラスのチームの選手ですと会社で働いていますので、試合会場でメンバー外の選手が「今日は試合出ないのか？」などと上司や同僚に言われているのを目にすることもありますが、トップリーグですとそのようなことを見かけられないので、今後、これまでのようなトップリーグのチームのあり方というのは、許されなくなってくるのだらうと思います。

井上：読売クラブのようなクラブがあればまた違うのでしょうか。全て古河電工なんですよ。

浦和：サニックスなどは、ラグビーを辞めたらサニックスを退社するという、読売クラブ的な組織ではありますよね。ただそれが認知されていない。強化には繋がりませんが、トップイーストの釜石シーウェイブスのように仕事をきちんとしながらラグビーをするチームを増やしていったほうが続いていくのではないかと感じます。今のトップリーグの強豪チームはそのまま残るとしても、それ以下のカテゴリーには、社業と両立するクラブもあつたり、クラブチームでありながら社会人連盟でプレーするクラブといった形で、色々な会社に仕事をさせてもらってその後にラグビーをするといったスタイルのチームが重要になるではないかと思っています。

井上：社業との両立というのは重要なテーマですね。チャンピオンスポーツとして世界一を目指すというと、会社に根ざしたスポーツ文化というのは両立し得ないものかと思っています。

参加者：昔は会社にラグビーが好きなお偉方がいて、その人が会社にいる限りラグビーが続いたのですが、今はだんだんそうはいかなくなってきていて、ではもう止めようという話になりかねない。プロ化すると会社に出勤しない人たちが増えてくる。そうすると果たして会社に根付いていたという部分はどうなるのかという問題もあります。数年前に知り合った、NTT 東日本のドラフトにかかった選手が、やはり全く会社に行かなかったということを書いていました。かつては都市対抗野球で同じ課に所属する人たちが応援に来てくれていて、その観客席で会社の同窓会のような雰囲気にもなっていましたが、そういうものがだんだんなくなってきて、果たしてそれがいいことなどうなのかわからないと言っていました。

井上：私の現役時代も会社の人が応援に来てくれていたし、遠征に行くとお土産を買ってきたりと、そうやってコミュニケーションをとっていましたけどね。

浦和：2019年に勝つという目標を掲げる以上、会社から離れて行かざるを得ないという強制的な流れがある一方で、

ラグビーの世界としては、仕事も頑張りラグビーも頑張るといふものを心の底では求めているわけです。目標がある以上、プロ化に向かって進んで行かざるを得ない。また、今のトップリーグのチームが下のカテゴリーに落ち、プロになりたいチームがいくつか集まってプロリーグが再編されるという流れになるのかもしれませんが。

4. トップリーグと社会人選手権ーレベルアップにつながる競技会は？

中塚：話を聞いて新鮮だった部分は、トップリーグが社会人リーグなんだというところで、雇用契約を結んでいないと試合に出られないというのが、そうだったのかと思われました。そうであるのならば、社会人大会が発展的に解消してトップリーグになったと言うけど、一体どこが変わったのですか。

浦和：全国社会人大会は関東や関西・九州リーグの代表が出場していましたが、トップリーグになりリーグ戦になりました。

牛木：その当時の社会人選手権はすべて職場のチームだったということだったのですか。

浦和：そうです。

牛木：クラブチームは社会人選手権に出場できなかったのですね。

浦和：規約上、単一企業に雇用された選手により構成されたチームのみとなります。社会人連盟のチームは単一企業に雇用されているか、これまでの予算をキープするという条件でオープン化されたチームのみですが、後者は非常に少ない事例です。ただ、下のカテゴリーでは、例えば新日鉄本社クラブがNSC ラガーという名前になり、新日鉄の社員でなくても関東社会人の下のほうのカテゴリーでプレーしている事例もあります。

牛木：私が先ほど質問した内容は、かつてサッカーの世界では、職場のチームを実業団と呼び、社会人はクラブも含めて、つまり大人のチームということで社会人チームと呼んでいました。私は新潟国体の前に県のスポーツ振興審議会の委員だったのですが、実業団を強化しようという議案が出ました。私は社会人を強化しようとして主張し、それがもとで始まったのが、今のアルビレックス新潟です。今のお話を聞いていると、ラグビーでは実業団を社会人と呼んでいるのだというですね。

浦和：そうですね。

★発表者（浦和）補足

84条4項に「法人名登録申請であっても、本条でいう関連会社に該当しない法人の選手が登録されている場合、またはその法人に公認されていない（財務的、勤務的優遇等受けていない）チームは一般クラブチームとみなす。」とあります。一方86条には「クラブチームとして登録し、トップリーグおよび日本選手権に出場する、または出場を目指すチームは選手登録について社会人チームと同様の規制を受ける」ともあります。

トップリーグを目指せる環境を整えた上であればクラブチームでも社会人扱いを受けることは可能かと思います。

井上：会社のクラブと非会社のクラブが別々の全国大会をしていて、クラブ選手権は昔からやっていますね。

浦和：クラブ選手権が全国的になったのはわりと最近だと思います。以前は、関東クラブ選手権や関西クラブ選手

権というかたちであっただけで、全国規模になったのは、かつてサッカーの天皇杯のように、大きな形式で日本選手権を行ったときに出てきた流れだと思います。

★発表者（浦和） 補足

上記の発言は浦和の確認不足によるものであり、クラブ選手権は1993年より開催されており今年で20回を数えています。2003～2004シーズンより、クラブチームが日本選手権に参加できるようになっています。

中塚：そういうこともあったのですね。

浦和：一度だけありました。お金と時間がかかるだけで、結局最後は同じチームが試合をする結果だったので、今は無くなってしまいました。また、シーウェイブスはクラブチームですが、社会人連盟に加盟していますのでクラブ選手権には参加できません。

★発表者（浦和） 補足

上記の取り消している発言は浦和の確認不足によるものであり、規約86条に「クラブチームとして登録し、トップリーグおよび日本選手権に出場する、または出場を目指すチームは選手登録について社会人チームと同様の規制を受ける」とあります。トップリーグ入りを希望するクラブチームは責任企業を立てた上で申請すれば上位リーグへの加入は可能かと思われます。

中塚：すると、現行のルールのもとでそのようなチームを作るのが早いのか、それとも現行のトップリーグのルールを改正して本当のトップのチームが参加できるようなリーグを作ることが早いのか、どちらでしょうね。何か手を打たないとダメですよ。

主な国のプロリーグと区別対抗戦				
区名	世界ランキング	区内プロリーグ	区際選手権	区別対抗戦
ニュージーランド	1	NPC	スーパーラグビー	ラグビーチャンピオンシップ
南アフリカ	2	カリーカップ		
オーストラリア	3			
アルゼンチン	8		ハイネケンカップ	シックスネーションズ
フランス	4	TOP14		
イングランド	5	プレミアシップ		
アイルランド	6	セルティックリーグ		
ウェールズ	9			
イタリア	10			
スコットランド	12			
サモア	7		PNC	
トンガ	11			
フィジー	13			
日本	15	トップリーグ		

浦和：例えば、南半球のスーパーラグビーに日本人のチームを作り、代表選手を雇って参加するというのが早いのか

かもしれません。日本にいまあるルールを壊すよりも、南半球のリーグに参加していく。例えば東京と大阪にプロチームを作り選手を集める。

中塚：それは国際的なルール、IRB のルール上、大丈夫なのでしょう。

浦和：問題ありません。資料に主な世界のプロリーグと国別対抗戦の表がありますが、イングランドやフランスは国内で完結するリーグをもっていますが、アイルランド・ウェールズ・スコットランドが開催しているケルティックリーグでは、クラブチームの上に地域代表チームあり、各国4チーム程度を集めてリーグ戦を行っています。スーパーラグビーも、ニュージーランド・オーストラリア・南アフリカ各国から5チームを集めて大会を行っていますので、そこに日本も入れてもらう。入れてもらえるようなリーグを作って参戦していくほうが、このしがらみの多いラグビーの世界でルールを少しずつ変えていくよりは、強化という意味では早いと思います。

参加者：基本的に雇用が1年以上という規約は、例外もあるでしょうが嘘ということなんですね。実際は高給なパートタイマーなのだから。トップリーグのチームは強いものだから、どのチームが連盟に加盟しようが実力で上がって来れないというかたちにしてしまえばいいと思うのですが。

浦和：この世界はそう簡単には変わらないのです。

★発表者（浦和）補足

上記発言は浦和の確認不足によるものであり、後日規約を読み込みますと、上の参加者の方の意見に近い形で制度上は動くこともできるかと思います。

参加者：対抗戦グループとリーグ戦グループのようなものですか。

浦和：対抗戦とリーグ戦も、30年も40年も前に、分裂するまでのちょっとずつの諍いが長期化して別れてしまって、もう戻らないかたちで続いています。

5. 2019年の先には…

参加者：ふと思ったのですが、最悪の場合、2019年までは皆頑張って応援しますが、それが終わるとトップリーグを運営しているチームやスポンサーが全て手放すという可能性はないでしょうか。

浦和：私はあり得ると思います。ですから自分たちでなんとかできるような、いまの枠の中でも動けるようにしつつ、2019年という盛り上がりの中で、2020年以降に生き残れる道をそれぞれが探していかなければならないと思います。2019年まではこの勢いで盛り上がるかもしれませんが、ここで大負けしたらみんなが手を引いてしまうと思います。

参加者：いや、ぼろ負けだけでなく、企業は2019年までは協力してあげなくてはいけないので頑張る、ただ終わった後に大義名分がなくなるので、お金ばかりかかってしまうので止めようという話になるのでは。

浦和：なり得ると思います。ただ、その場合はシーウェイブスのような、身の丈にあった、働きながらラグビーをするチームだけが残っていくのだと思います。

嶋崎：2つの視点があって、強化という点と国内のラグビーをきちっと守っていくという点を分けて考えていかなければいけないと思います。強化の視点で言うと、大学というのは大きなネックになります。帝京大学には146人も部員がいて、1年生や2年生にもいい選手はたくさんいるのに、公式戦に出られる選手は一部のみで、そこで強化は止まってしまっています。アンダー20世代の強化が遅れていくので、代表の強化も遅れてしまっています。そしてトップリーグとの格差がますます開いていく状況です。この年代を強化するには、浦和さんが言ったように、アンダー20の選手を集めてチームを作り、トップリーグの下部リーグに参加するような道筋が必要です。また代表チームが海外リーグへ参戦するといったことも考えていかないといけないはずですよ。

その部分と、国内の伝統的な早稲田・慶応、神戸製鋼やサントリーなどラグビーをサポートしてくれる企業、あるいは九州電力や横河電機は会社の幹部がラグビー畑出身で、プロ化をせず、選手は全員正社員。きっちり仕事をしているチームは、そこにラグビーが根付いているのであれば、あえてそれをぶち壊してしまわず、そこはそこですというほうがいいのかないかなというのもあるとは思いますが。

それともう一つはクラブチームですよ。最近クラブチームが優秀になってきて、例えば北海道バーバリアンズは自前の素晴らしい芝のグラウンド2面持っていて、NPO法人化して総合型地域スポーツクラブとなっており、そういった本当のクラブ、これをしっかりと育成していく事の方がむしろいまの企業チームをどうしようかと言うよりは重要だと思います。クラブチームであれば、どこで働いていようが、学生であろうがプレーでき、バーバリアンズ・六甲・タマリバ・駒場といった、マネジメントがしっかりできているクラブチームもあるので、そこを発展させて本当のクラブを作ることが大事なのだと思います。

バーバリアンズは非常に良い事例だと思います。バーバリアンズには外国人選手もいますが、彼らをクラブとして雇っています。中心となっている田尻さんが自分の会社を持っていて、その社員として外国選手を抱えてプレーさせています。

改革は、変えていく事よりも創る事に重点を置くべきだと思います。

参加者：協会はそういう方向を向いているのですか。

浦和：「今日は神戸とサントリーで客が入るなあ」とか、「今年の決勝は集客が悪いからしくじったなあ」とか、そういう世界なので。

嶋崎：協会の人には、「今日は早稲田の試合だから客が入るなあ」といったノリですよ。帝京と東海じゃ決勝も駄目だなあ」といった感じで。結局、企業頼り、大学頼りなのがラグビー協会の体質なので、そこはなかなか変わらないですね。

浦和：例えば熊谷にはグラウンドが三面ある立派なラグビー場が3面ありますが、北海道バーバリアンズや花園ラグビー場の近鉄ライナーズのように、埼玉をホームにした、地域の人に愛されるようなラグビークラブは存在しません。本来ならば北海道バーバリアンズをいい事例として埼玉にチームを作り、熊谷ラグビー場を起点にワールドカップに向けてラグビーを盛り上げていくといった招致委員会を中心とした取り組みが必要とされているはずなのですが、我々の耳には入って来ないというのが現状です。

6. 学校から地域クラブへラグビーの受け皿を

嶋崎：ラグビーは地域間格差が非常に大きいスポーツです。高校ラグビーでは県内に2校しかない県もあり、5校などというところはたくさんあります。例えば徳島の貞光工業は、毎年全国大会に出場し、四国大会でも優勝す

るようなチームですが、東京ではベスト8に入るか入らないかの帝京高校と試合をすると勝ったり負けたりといったレベルです。極端に言えば、帝京高校も徳島にいれば花園に出られてしまうかもしれない。それぐらい地域間格差が大きいのです。つまりラグビーを全くやっていない地方もあるわけです。

「ラグビーは楽しい」と思う人は必ずいるはずなので、そういった地域にクラブを育成していく必要はあると思いますし、また秋田・釜石・熊谷といった、伝統的にラグビーが盛んな地域にもクラブを立ち上げてきちっと育成していくことのほうが、トップリーグに手を付けるよりも普及という観点では成功するはずで、トップリーグは企業でやっている限り、どうしても東京と大阪、それに福岡に集中してしまうので、その他の地方には普及する可能性は非常に低いと思います。

小澤：一つお伺いしたいのですが、ラグビーは学校スポーツで支えられている、成り立っていると思うのですが、これがもし高校・大学を撤廃してクラブだけになったら日本にラグビーは存在し得なく、高校ラグビー代表等があるから存在できているレベルだと思います。それはサッカーもかつて同じ状況であって、高校・大学・社会人となっていた。しかしある時点から、高校を卒業して大学を通り越してJリーガーになる選手もいます。サッカー関係者からは大学サッカーにレベルが落ちたと聞きます。その辺りはどうなのでしょう。

中塚：Jリーグが始まった当初は、一時的に大学サッカーのレベルは下がりました。

参加者：Jリーグのユースチームからトップに上がれない選手は皆、大学サッカーに進む傾向があります。早稲田などは11人中8人がJユース育ちです。いい意味で受け皿になっていると言えると思います。

小澤：そこにヒントがあるのでは。大学ラグビーを強化するよりも、もっと下のカテゴリーに焦点を当てたほうが、効果があるのではないのでしょうか。

浦和：しかし2019年をターゲットに絞ると、強化すべき選手はすでに大学に来ていて、もしくは高校生でも行く学校は決まっています。強化という意味では効果は上がらないでしょうし、クラブを作ったからと言っても学校ラグビーがなくなるわけではないと思います。しかしながら、筑波大附属高校にラグビー部員が15人いないとはいえラグビー部がありますが（正確には同好会：中塚注）、ラグビー部がない学校の生徒は、高体連の規約上、合同チームにも参加できず、たとえ生徒が望んでいてもラグビーをすることができないのが現状です。高校ラグビーとは別の筋道としてクラブというものがあっても良いのではないかと思います。

小澤：ラグビー界はクラブ育成も行うべきだと思います。サッカーはかつてはそれほどクラブチームが多いイメージはありませんでしたが、うまく成功していると思います。

浦和：いや、サッカーのクラブチームは昔からありましたよ。読売クラブユースは1969年のクラブ創設時から積み上げてきたわけですし、Jリーグができてユースができたわけではなく、ユースはユースとして昔からあり、それがJリーグ創設をきっかけにJクラブの中に組織化されたと考えた方がいいと思います。

小澤：高校サッカーとユースの立ち位置はどのようになっているのでしょうか。お互いの交流試合は存在するのでしょうか。

参加者：今はもう完全に一緒にユースリーグでプレーしています。

小澤：それは昔からでしょうか。

浦和：高円宮杯は昔からありましたね。リーグ戦というかたちではここ6、7年だと思います。

参加者：以前は高校チームが優勢でしたが、最近はユースチームが強いですね。

嶋崎：最近の傾向では、良い選手はJのユースに入ります。例えば帝京高校には来ません。帝京高校に在学しているのにFC東京の選手といった生徒もいます。

小澤：ということは、高校サッカーのレベルは下がっているのでしょうか。

浦和：U-15の段階で良い選手だと思われる選手はJのクラブへ行きますが、遅咲きの選手には、Jのユースに上がれずに高校サッカーで成長しプロになる選手も多いです。日本代表にはユース出身者はそれほど多くないという事実もあります。

小澤：それは何故でしょうか。

浦和：早い段階で良いとされた選手が、必ずしもそのままトップ選手に成長するわけではありませんし、後からのびる選手もいます。またプロの世界は厳しいですから、その中で自分で考えられる選手が成功していくという側面もあると思います。18歳でプロの世界に入ってなかなか試合に出られない状況にいるよりも、大学サッカーで試合を通じて成長することができるということもあります。

中塚：大学サッカーの話に戻りますと、Jリーグができた当初は、確かに大学サッカーのレベルが落ちました。しかし高卒でプロになった選手がどうなったかという、陽の目を浴びなかった選手たちは1～2年で首を切られてしまいました。そういった状況を目の当たりにした高校の先生たちは、例えば大学に推薦で行けるのであれば、ストレートにプロになるよりは大学に行った方がいいと考える人が多くなっているのが現状です。同時に、大学は大学でさまざまな状況の変化に対応し、トレーニング内容や環境を改善しています。寮を作り人工芝グラウンドを作り、栄養面もケアしながら大学生活を送れる環境を作り、トップチーム以外であっても試合に出られるIリーグ等が整備され、大学サッカー環境は以前とは大違いです。そういった環境が整ってきたので、高校側からは送り出しやすいですね。大学サッカーのレベルはまた高くなってきていると感じます。

参加者：ユニバーシアードでは日本はいい成績を残していますよね。

浦和：関東大学リーグはチームが増えましたよね。

参加者：かつては秋に7試合、8試合だったのが、年間を通したリーグ戦になり、チームも増えて試合数も増加したので年間メンバーを固定して戦うことが難しい状況になり、試合に出場する選手が増えたのも事実です。

7. ユース年代からの育成と普及

参加者：先ほど放映権料の話がありましたが、ラグビー界では入ってきた放映権料はどのように使われているのでしょうか。

参加者：その時の雇用はどのようになっていますか。

参加者：中竹さんは協会に雇用されています。

浦和：中竹さんは協会に雇用されて、マネージメントをする担当するリソースコーチという肩書きで活動しているんですね。

参加者：協会の財源は主として放映権料なのですか。

浦和：あとは入場料と、登録費です。

参加者：昔から大幅に増えた放映権料は、強化という視点で代表に使われているということでしょうか。

嶋崎：ユース年代も含めて代表に使われています。以前は日本代表だけだったのが、ブロックごとに合宿やトレーニングが行われるようになり、それに参加する指導者とトレーニングを受けられる選手の数は増えています。その活動を統括する人間は協会に雇用されていますので、そういった意味では環境はだいぶ整ってきたと思います。

参加者：育成に関わるにはお金は出すが、グラスルーツや普及と行った面には手が届かないのが現状ということでしょうか。

参加者：普及の活動はほとんどないと思います。

浦和：普及に関しては、トップリーグのチームが自発的に社会貢献といったかたちで選手を派遣しラグビーを教えたりというように、各チームに任されているというのが現状ですね。

嶋崎：サントリーのプロ選手の契約にはそういった内容も含まれていて、高校生の指導を行ったりしています。

中塚：もっと広い意味で、ラグビーに興味を持つ人を増やすためには、体育の授業が果たす役割も大きいのでは。

浦和：体育の授業ですと、ラグビー経験者にボコボコにされるだけといったネガティブな印象が拭えないですね。

中塚：私は毎年この時期に、高校2年生の体育でラグビーの授業を受け持ちます。最初の授業で「ラグビーをやったことがある人」という質問をすると誰もいないのですが、「ラグビーを見たことがある人」の質問には1人だけ手を挙げました。彼は去年のワールドカップで日本が引き分けた試合を見たということでした。「一度本物のラグビーの試合を見てみよう」ということになり、次の授業は全員教室で、“世界一”を決める2011年の決勝戦、オールブラックスとフランスの試合の前半だけを見せました。何の説明もなしに、選手入場から前半の試合を見た感想を書かせたものがありますので是非読んでみてください。すごく面白いです。

本当はここで7人制ラグビーの話もできれば良かったのですが、時間切れです。このあとは「ルン」で続きをやりましょう。

それでは最後に浦和さん。

浦和：今日は本当に色々な意見を聞くことができて嬉しかったです。私の拙い発表でお聞き苦しいところもあった

かと思いますが、是非2019年に向けてラグビーを見て、知り合いの方に、一緒に見よう、ラグビーをやってみようと、輪を広げていただききたいと思います。本日はありがとうございました。

V. 参加者からのコメント

◆牛木素吉郎

1. トップリーグについて無知だった

ラグビーのトップリーグを、ほとんど理解していなかったことに気が付きました。もちろん、こちらの不勉強のせいです。たとえば、次のようなことを、初めて知りました。

- 1) トップリーグは、いわゆる「実業団」のリーグであること。同じ職場の社員、職員によって構成されている会社等のチームに限られている。
- 2) 「社会人チーム」のリーグと説明されているが、地域単位、あるいは学校OB等によるクラブチームは入れないこと。
- 3) 選手は職場の組織（会社等）と雇用契約をしていなければならないこと。しかし主力選手の多くは永年雇用ではなく1年契約で事実上「プロ選手」であること。
選手は「ラグビーの能力によって雇われている社員」ということでしょうか？

2. 「会社ラグビー文化」への愛着を知った

ラグビー界に詳しい方のお話を聞いていて、「会社ラグビー」という文化があり、それに強い愛着を持っている人たちがいることを知りました。

「大学ラグビー」は独自の伝統的文化を持っています。その良さを愛する人たちは大勢います。しかし、比較的歴史の浅い企業内ラグビーに独自の「文化」を見出し、愛着を持っている人たちがいることは、考えたこともありませんでした。

早稲田大学や明治大学の学生や卒業生でなくても、早大や明大のラグビーが好きな人は大勢います。

しかしサントリーやNTTなどの営利企業のチームが、企業外に永続的で幅広いファンを獲得できるとは思えません。企業チームを基盤に、スポーツ振興をはかるのは難しいと思います。

3. 伝統文化か？ 構造改革か？

浦和俊介さんが提案された「プロクラブ化」「ホームタウンの確立」「U-20世代の育成」などは、いずれもラグビー界が検討を迫られている課題だと思います。

しかし大学ラグビーの文化、会社内ラグビーの文化に執着しては、構造改革は難しいと思いました。

伝統文化の良さを守るか？ 思い切った構造改革を推進するか？

日本のラグビーは2019年のワールドカップ日本開催を機会に、厳しい選択に直面しているのではないのでしょうか？